

6324 ハーモニック・ドライブ・システムズ

伊藤 光昌 (イトウ ミツマサ)

株式会社ハーモニック・ドライブ・システムズ会長

ロボットの小型・高速化ニーズに合致した新製品を開発

◆産業用ロボットが好調に推移

社長 長井啓

2014年3月期第2四半期は、ロボット関連、半導体製造装置が比較的堅調に推移した。また、為替が大きく円安に振れたため、海外関係会社の収益が改善している。為替感応度は、対ドル1円の変動で年間売上高が約400百万円、営業利益が25百万円である。

連結売上高は104億11百万円(前年同期比5.7%増)となった。ロボット向けでは大手EMS向けの売上が減少したが、半導体製造装置、FPD製造装置、石油掘削装置などは比較的堅調に推移した。売上高の増加に連動し販管費も増加したが、増収効果により営業利益は24億4百万円(同8.5%増)となった。経常利益は、ドイツの持分法関連会社の大幅な収益改善が貢献し25億57百万円(同15.8%増)となった。設備投資額および研究開発費は、例年とほぼ同水準である。

主要グループの状況としては、米国子会社のハーモニック・ドライブ・エルエルシーはドルベースで減収となったものの、円安効果で日本からの仕入価格が低下したことに加え、連結に取り込む際の為替換算レートが有利に働いたことから増収増益となった。用途別では、航空・宇宙関連の売上が減少したが、半導体、医療機器関連は伸びている。ドイツの持分法関連会社ハーモニック・ドライブ・アーゲーも円安が貢献し増収増益となった。精密遊星減速機を製造している国内子会社のハーモニック・エイディでは、モーターメーカー向けギアヘッド、パラレルリンクロボット向けが貢献した。より厳しい環境下でも収益を生み出す会社にするため、前期から親会社との仕切り値を変更したことにより若干の減益となったが、この影響は連結ベースでは相殺される。

単体については、国内ロボットメーカーからの引き合いが堅調に推移したため増収増益となった。用途別売上高の状況としては、半導体製造装置については微細化投資が全体をけん引し、緩やかな回復基調にある。FPD製造装置は、中国におけるパネルメーカー等の設備投資案件により大幅な増収となった。有機EL関連の搬送ロボットなどにも使われており、案件の増加だけでなく、大型化に対応する新製品を拡充したことも大きな要因である。産業用ロボットは足もとの需要が増加傾向にあり、第2次ロボットブームと言えるかもしれない。自動車関連に加え、最近ではEMS系の小型組立ロボット向けが増加しており、売上高比率はおおよそ半々となっている。当期は特に溶接・塗装ロボット関連が堅調であった。中国の自動車メーカーではまだ溶接ロボットの導入が進んでいないため、今後も伸びる余地がある。小型組立ロボットは、iPhoneやiPadの売れ行きに影響されるが、今後も伸びが期待できる。

単体営業利益の増加要因としては、増収の影響が2億27百万円、為替の影響を含んだ限界利益率の改善が50百万円であった。一方、製造固定費の増加、販管費の増加が減益要因となったが、これは賞与を業績連動としているため、業績の改善に伴って人件費が増加したことによるものである。

◆通期の連結業績予想を上方修正

連結資産の状況としては、株価上昇により、投資その他の資産が前期末比で増加した。純資産については、剰余金の増加により株主資本が増加した。営業活動によるキャッシュ・フローは、法人税の支払い等によって前年同期比で減少した。投資活動によるキャッシュ・フローは定期預金の払い戻し、財務活動によるキャッシュ・フローは長期借入金の返済が主な増減要因である。以上の結果、現金および現金同等物の四半期末残高は94億15百万円となった。

通期の連結業績予想については、11月12日に上方修正を発表した。為替は通期平均で1ドル97円、1ユーロ130円を前提としている。売上高は、下期で約110億円、通期では214億円(前期比18%増)を見込んでいる。営業利益については、韓国子会社の立ち上げに伴うコスト増などを織り込み、49億30百万円(同43.5%増)とした。

主要グループの業績予想としては、米国子会社については、航空・宇宙関連が減少するものの、半導体、医療機器関連が底堅く、増収増益を見込んでいる。ハーモニック・エイディについては、足もとの需要が回復基調にあり、売上・利益ともに増加すると見込んでいる。ドイツの持分法関連会社については、ロボット、工作機械向けが回復傾向にあるため、増収増益となる見込みである。

単体の売上高は188億円を見込んでいる。ここ3年は夏場から受注が下降傾向になったが、今期はロボット関連が好調を維持している。下期の予想売上高は97億10百万円であり、半導体製造装置では前工程関連で台湾・韓国のデバイスメーカーの微細化投資が堅調に推移、FPD製造装置はやや下降傾向にあるが、今後新たな投資案件が出てくると予想している。モーターメーカー向けギアヘッドについてはサーボモーターメーカー各社が上期を上回る計画を出しているため、当社の売上高も増加すると見込んでいる。

単体の営業利益は42億円、営業利益率は22.3%を見込んでいる。増収要因としては、増収の影響で14億60百万円、限界利益率等の改善で1億50百万円を予想している。一方、減収要因としては、製造固定費の増加で1億55百万円を予想しているが、これは工具・治具類の購入によるものであり、通常の範囲を超えるものではない。販管費の増加は2億10百万円を見込んでおり、業績連動による賞与の増加である。

◆韓国で遊星減速機の生産を開始

主要用途の動向としては、半導体製造装置については、デバイスメーカーの寡占化、業界の大型再編が進んでいるが、今後も微細化、ウエハーの大口径化などの技術が求められるため、当社製品へのニーズは継続するとみている。

産業用ロボットについては、日本に7~10社、ヨーロッパに2社の大手メーカーがあるが、現在、中国でもロボットを製造している会社が増えている。技術動向としては、自動車関連の大型ロボットに加え、小型・軽量ロボットの新規開発が増加している。当社の精密減速機は、小型・軽量を特長としているので追い風であるが、今後も製品の拡充、コア技術の強化に力を入れていく。

当社では、減速機の基本性能の向上に加え、周辺部品の開発、すり合わせ技術などで使い勝手の向上を図り、中空形状、低騒音など、軸ごとに異なるニーズに対応できる体制を整えている。すべての製品に1年間の保証を付けているが、NASAの火星探査機に使われている製品は10年間動き続けており、耐久性も含めて高い総合力を有している。

新製品としては、「ハーモニックドライブ®」の軽量ユニットタイプを市場に投入した。小型化・高速化といったロボットメーカーのニーズに合致し、良い感触を得ている。また、FPD製造装置向けでも、減速機の軽量化が評価され、引き合いが増加している。

メカトロニクス製品では、三菱電機様のアンプで当社アクチュエーターを駆動できるよう、モーターメーカーとのコラボレーションを開始した。

精密遊星減速機では、エントリーモデルの開発を進めており、主にマーケティングの観点から、戦略商品として韓国(アジア)市場向けの「HPNシリーズ」を発売した。韓国の代理店である三益 HDS 社とのジョイントベンチャー

で三益 ADM 社を設立し、今年 8 月から本格的な生産を開始した。当社としては、まず「HPN シリーズ」でアジア市場の門戸を開き、高性能なモーションコントロールのニーズが高まった時点で「HPGP シリーズ」、「ハーモニックドライブ®」を売り込んでいきたいと考えている。

◆精密制御に軸足を置いて事業を展開

会長 伊藤光昌

上期の業績は当初計画を上回った。当社のトータル・モーション・コントロールという概念が、自動車や家電、医療機器等の進化に受け入れられ、評価された結果だと思っている。

ただし、中期経営計画は達成しておらず、設備投資の動向に左右される敏感な収益構造であるため、日々の努力を重ねることが何にも増して大切であると認識している。なお、中期経営計画の基本的な考え方は、策定当初から変わっていない。定量的な計画は未達であるが、将来を見据えた布石は着実に打っており、成果は徐々に表れるものと考えている。

今後は、いつどこから生まれるかわからない将来のイノベーションに寄与できる体制を構築することが重要となってくる。ものづくりは、技術・技能の進化・変化が大切な要素であり、それを通じて製造業の真の復活が世界的に為されれば、中間層の幅を広げることになり、社会の安定にもつながる。このような観点に立ち、当社グループは、精密制御に軸足を置き、トータル・モーション・コントロールの更なる高度化を目指して前進していきたいと考えている。

(平成 25 年 11 月 21 日・東京)

* 当日の説明会資料は以下の HP アドレスから見ることができます。

<http://www.hds.co.jp/ir/event/accounts/>